棕梠の主日礼拝説教「願いどおりよりも良いこと」予稿
日本基督教団石神井教会　2022年4月10日

【棕櫚の行列・旧約聖書】ゼカリヤ書　9章9～10節

9 娘シオンよ、大いに踊れ。
　娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
　見よ、あなたの王が来る。
　彼は神に従い、勝利を与えられた者
　高ぶることなく、ろばに乗って来る
　雌ろばの子であるろばに乗って。
10 わたしはエフライムから戦車を
　エルサレムから軍馬を絶つ。
　戦いの弓は絶たれ
　諸国の民に平和が告げられる。
　彼の支配は海から海へ
　大河から地の果てにまで及ぶ。

【棕櫚の行列・福音書】マルコによる福音書　11章1～11節

1一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベ
タニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、2
言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗った
ことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来
なさい。3もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主
がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」4二人
は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたの
で、それをほどいた。5すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろば
をほどいてどうするのか」と言った。6二人が、イエスの言われたとおり話す
と、許してくれた。7二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、そ
の上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8多くの人が自
分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て
道に敷いた。9そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。
　「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。
10 我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。
　いと高きところにホサナ。」
11こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を
見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行
かれた。

【福音書日課】マルコによる福音書　14章32～42節

32一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが
祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。33そして、ペトロ、ヤ
コブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、34彼らに言
われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていな
さい。」35少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみ
の時が自分から過ぎ去るようにと祈り、36こう言われた。「アッバ、父よ、
あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。
しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」
37それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言
われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなか
ったのか。38誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えて
も、肉体は弱い。」39更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。40再び戻
って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼ら
は、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。41イエスは三度目に戻
って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれ
でいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。42立て、行こう。
見よ、わたしを裏切る者が来た。」

「主がお入り用なのです」【こども説教のために】

「受難節（レント）」の期節を歩んできた教会は、今日、その最後の一週間である「受難週」を迎えました。いよいよ、主イエスが向かわれたところに、わたしたちの目を向け、心を留めるべきときです。

主イエスが向かわれたのは、都エルサレムでした。ユダヤ人が何百年も守って来た神殿の建てられた町です。主イエスは、これまでにも祭りのたびに、この町を訪れていらしたことでしょう。このときも、エルサレムの町は、「過越祭」を祝う多くの人々で賑わっていたのです。

祭を祝う人々の中に入って行かれるために、主イエスは、他の巡礼者らと同じように歩いて町に入ることもできました。けれども、そのときは、一頭の子ろばを用意させて、それにお乗りになって町に入られたのです。

「**主がお入り用なのです**」と断って、弟子たちは、主イエスがお乗りになる子ろばを連れて来ました。まだ、家畜として役に立たない小さな子ろばを連れて来るようにと、主イエスがお命じになられたのです。「神のお働きのために、まだ小さなあなたが必要なのです」と。

十字架に向かわれる主イエスのお働きのために、小さなわたしたち一人ひとりが必要とされているのです。

引き渡される

「**ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように**」。

エルサレムの町に入られる主イエスに向けて歓迎の叫びを上げた人々と同じようにして、わたしたちは、この「棕梠の主日」の礼拝を始めました。

それは、数日後には逮捕され、裁かれ、十字架刑に処せられる方に向けられるには似つかわしくない歓迎の仕方のように思えます。いいえ、この方が、人々を解放する英雄としてこの町に乗り込み、権力者との闘争の果てに殉教的な死を遂げた、ということならば、それでもよいのかもしれません。けれども、この方は、当局の手配した人々の手で捕えられたときでさえ、少しも抵抗しなかったのです。無抵抗の非暴力主義、と言えば聞こえは良いかもしれません。けれども、この方のエルサレムの町に入られるのを迎えた人々は、そのような方だと理解して、「**ホサナ**」と歓迎したわけではなかったでしょう。この人ならば必ずこの都で大きなことを成し遂げくれるだろうと期待して、歓迎したのではなかったでしょうか。

主イエスからあらかじめご自身が逮捕されて殺されるだろうことを聞かされていた弟子たちの中には、「子ろば」に乗って町に入るというような一種のパフォーマンスをなさろうとする主イエスの行動が理解できない者もあったかもしれません。わざわざ目立つ行動をして、自らの死を引き寄せているようにしか思えないのですから。

もちろん、弟子たちの幾人かは、すでに主イエスと共に死ぬつもりで、そこにいたはずです。その彼らには、「子ろば」に乗って歓迎の叫びを受けるという出来事は、死を前にした束の間の輝きに思えたかもしれません。

わたしたちは、どうなのでしょうか。どのような思いで、今日、主イエスを「**主の名によって来られる方**」とお呼びして、歓迎の歌を歌ったのでしょうか。このお方に、何を期待しているのでしょうか。

このお方は、数日後には、人々の手に引き渡されて行かれるのです。ただ、神殿の境内で小さな騒ぎを惹き起こしたり、人々と論争をしたりするだけで、何も実現することなく、人々の手に引き渡されるのです。せめて従って来た弟子たちをご自身に代わる立派な働き人に育て上げることができたのかと言えば、それさえ心許ないのです。

ただ、このお方は、弟子たちと共に居続けられたのです。弟子たちをご自身の歩みに伴い続けられたのです。あまり頼りにならないと思われる弟子たちを傍らに置き続けられたのです。そして、そのまま、ご自身を死に至らせようとする者たちの手に引き渡されて行かれたのです。弟子たちのもとから取り去られるようにして、このお方は、人々の手に引き渡されて行かれたのです。十字架の上に、死の墓に、引き渡されて行かれたのです。

「立て、行こう」

「**ゲツセマネ**」は、エルサレムの町の外、谷を越えたオリーブ山の麓にあった、オリーブ油の搾り場のことを指すようです。おそらくどこにでもある「搾り場」というだけの呼称ですが、そこだけが「ゲツセマネ」という場所として記憶されることになりました。主イエスが弟子たちを伴われて最後に過ごした場所、最後に祈られた場所、最後に人々の手に引き渡された場所です。弟子たちにとって、そこが、このお方との今生の別れをするところとなったのです。

けれども、彼らがそこを「ゲツセマネ」として覚え、そのとき為された主イエスの祈りを「ゲツセマネの祈り」として記憶するようになったのは、ただあの方を懐かしむため、ではなかったでしょう。

「**あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。**」

弟子たちが主イエスから面と向かって告げられた最後の言葉は、確かに、弟子たちの現実の姿を衝いていました。あのお方が祈っていらっしゃる間、彼らは目を覚ましていられなかったのです。「**目を覚まして祈っていなさい**」と言われても、あのお方が祈られている傍らで、ほんの一時も祈っていることができなかったのです。

その弟子たちの傍らで、あのお方は、祈られていました。祈り続けていらっしゃいました。「**アッバ、父よ**」と、繰り返し祈られていたのです。それは、しかし、決してすべてを悟りきった者の高潔な祈り、といったものではなかったのです。「**この杯をわたしから取り除けてください**」と祈られたこのお方は、ご自身の引き受けて来られたすべてのことを、肩に食い込む重荷を、できれば降ろしてしまいたいと思われていらしたのです。その重荷の中には、彼ら弟子たちのことも含まれていたはずです。いいえ、彼らのことを抜きにして、その「**杯**」を引き受けるということは、なかったでしょう。

「彼らのために」。それは、このお方にとってさえ、本音では「**わたしが願うこと**」ではなかった。けれども、それは、「**御心に適うこと**」。

そうです。弟子たちが、そのとき「ゲツセマネ」で知ったことは、このお方の十字架に向かわれる理由なのです。

「**立て、行こう**」と、このお方は彼らに呼びかけられました。「立て」。それは、「復活」を意味する語で告げられた言葉です。

このお方は、人々の手に引き渡されて、十字架に向かわれます。死に向かわれます。それは、再び「立つ」ためです。このお方ご自身が「立つ」ため、いいえ、それ以上に、彼ら弟子たちが「立つ」ためです。「復活」するためです。「眠り」から覚め、目覚めて祈る者として誰かの傍らに立つようになるためです。彼らは、このお方の死によって、立ち上がる者とされるのです。